



震災時の看護婦の仕事



地震がおそったとき、病院には五十一人の看護婦が働いていました。病院の敷地の中にある看護婦寄宿舎に一〇三人が住んでいました。地震がおこってから入院患者さんや救急外来での被災者への看護は、その時病院にいた看護婦と直ぐに寄宿舎や自宅からかけつけてきた看護婦達によって行われました。



地震がおこった日の看護婦の仕事



入院中の患者さんと看護婦



地震による激しい揺れで、棚の上においてあった書類や荷物は落ち、戸棚は倒れ、中の薬品や機械類は飛び出しました。病室や看護婦控え室、廊下などは足の踏み場もない状態になりました。ベッドは患者さんに乗せたまま三十〜百センチも動きました。歩いていたり、立っていた患者さんや看護婦は転んだり、尻餅をつきました。また、倒れた戸棚や医療器械にはさまれた看護婦もいました。そのため、数人の患者さんと看護婦が軽いけがをしました。しかし、看護婦は、激しい震動が治まると同時に、看

護婦としての仕事に移りました。

多くの看護婦が最初にしたことは、患者さんの名前を呼び、けがはないかどうかを確かめながら、患者さんを励まして病室を回りました。重症の患者さんがいる病棟の看護婦は、患者さんが使用中の人工呼吸器や心電図モニターや点滴のチューブ類が外れたり、こわれたりしていないかを確かめました。人工呼吸器や点滴のチューブが外れた患者さんを発見するとすぐに、他の看護婦、医師と協力して、予備の人工呼吸器を取りつけるなどの救急処置を行い、患者さんの命を守るために一生懸命に働きました。

また、火事を防ぐために、ガスの元栓を確認した看護婦がいました。一人の看護婦がボヤを発見しましたが、一人では消すことができず近くにいた医師の協力を得て、消火器を使って消し止めることが出来ました。

次に看護婦が行ったことは、余震の危険から患者さんを守るための避難の準備でした。避難の準備は



病棟の天井の破損



第一病棟 1階調理場南側トイレ壁等の損壊



① ストレッチャー

患者さんを寝かせたまま移送する車

当直の医師と相談して取り組みました。重症の患者さんを酸素ボンベや点滴と一緒に①ストレッチャーや車椅子に乗せ、軽症の患者さんの点滴をはずして一カ所に集合させました。また、患者さんのカルテなどのたいせつな書類や治療用の薬や器具をひとまとめにして、いつでも移動し、運び出せるように準備しました。

一番激しく揺れた九階にある一つの病棟は、医師と看護婦で患者さん全員を一階の外来患者用の駐車場まで避難させていました。また、激しい震動によって廊下や病室に倒れたり、散乱している物で、患者さんがけがをしないように片づけ始めました。これらの、避難や患者さんの安全をまもるために、地震発生約十分後から次々と、寄宿舎や自宅よりかけつけた看護婦達も協力しました。



救急外来を訪れた

人々への看護



救急外来には、地震が起こって約十分後から、けがをした人々が、自分で歩いて、あるいは家族や近所の人、通りがかりの人々に付き添われたり、畳に乗せられて運ばれてきました。その人々で、救急外来の診察室は、またたく間に一杯になり、廊下まであふれだしました。そのあたりは、けがをした人々の痛みの叫びと付き添っている人々の興奮した声で混乱していました。その中を看護婦は、てきぱきと働いて医師の指示を受けたり、看護婦としての専門的な判断で、患者さんを診察室に導いたり、手あてをしたり、手あてに使う注射器や針、薬、ガーゼなどを準備する仕事をしました。

救急外来やその側の廊下で簡単な手あてがなされた後、重症の人は、三階にある集中治療室に移



外来の廊下で治療を受けている患者さん

されることになりました。エレベーターは震動で止まっていたので、患者さんは階段の下までストレッチャーで、階段は担架で運ばれました。そのために、看護婦は、病棟にあるストレッチャーと担架を救急外来に集めました。けがの軽い人は、正面玄関近くの一般外来の診察室やその前の廊下に長椅子を並べて作ったベッドで、治療が続けられることになりました。その人々への手当、食事や[□]排泄の世話を行いました。また、痛みや不安で苦しむ患者さんや家族の話に耳を傾け、なぐさめることも看護婦の大切な仕事でした。

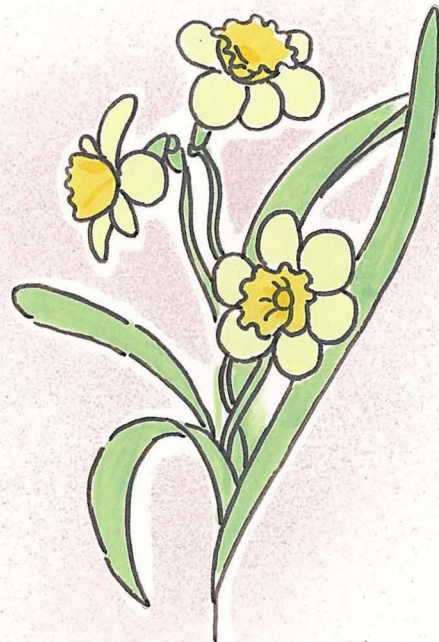
神戸大学病院の救急外来を訪れた患者さんは、地震が起こった日の一日間で、約四百人でした。その数は、ふだんの一カ月分の救急患者数に当たります。そのために、患者さんの手当に必要な器具や薬、ガーゼなどの材料はまたたく間に不足していききました。不足した物を整えて、患者さんの治療に間に合わせる事が看護婦の大切な仕事で



外来の廊下で治療を受けている患者さん

した。それらの品々を看護婦は、病棟から集め、あるいは応急の方法で消毒をして使いました。その後は被災地の外にある病院からの支援によって整えました。

四百人の中に、病院に到着した時、すでに心臓が止まっていた人が二十九人含まれていました。その人達は、医師によって救急処置が行われましたが、命を助けることはできませんでした。亡くなった人々には、医師による^②検死が行われました。その後、看護婦は遺体をきれいにふき清め、病院に備えてあった着物に着替えさせてあげ、毛布にくるんで遺体を預かる所に移しました。その後、神戸市が指定したお寺に移されるまでの間、その場所で二人の看護婦によって見守られました。二人の看護婦は、その遺体となった患者さんの通夜と、探し当ててようやくたどり着き、遺体と面会してなげき悲しむ家族の世話をしました。



① 排泄

尿や便をすること

② 検死

医師が死体の死亡の原因を知るために調べること

水やガスが使えない

◆◆ 病院の生活と看護 ◆◆

被災地では、地震発生と同時に電気、水、ガスが不通になってしまいました。病院の中でも例外ではなく、電気、水、ガスが不通になりました。神戸大学病院では、電気は地震発生後五時間で回復しました。それまでは自家発電機を使って電気が病棟や外来に送られたのです。しかし、水道は一週間後まで送られることなく、ガスは二月十六日まで使うことが出来ませんでした。水は、地震発生翌朝から病院の外来玄関前に、一日に数回神戸市から派遣された給水車から受け取ることとなりました。看護婦や医師、事務員などが近くに住んでいる被災者と共に、給水車の前に並んで、大



給水車

さまざまなポリバケツに水をくみ、台車に積んで、病棟や外来などに運びました。エレベーターが使えるようになるまでは、水を入れた容器を手で持って、階段を運びました。

病院では、入院患者や外来の患者さんのために、手あてに使った器具を洗う水、飲み水、水洗トイレに流す水、体を洗ったりふいたりする水が必要です。しかし、給水車からくみ取る水では、とても足りなくて、看護婦はいろいろと水の節約の方法を工夫して、水をおしんで使いました。水洗トイレは、少しの水を流すだけで済むように、トイレには便や紙は捨てないように工夫しました。手を洗ったり顔を洗うのは、洗面器にためたお水ですませるようにしました。患者さんの体をふくのは、ぬらしたタオルやウェットティッシュを電子レンジであたためて使いました。トイレに流す水は、機械や食器を洗った後の水を使いました。

水道からの水やガスが使えないためと、神戸市内の被災によって、食品が手に入らなくなったために、病



仮設トイレ

院では、患者さんの食事が作れなくなってしまいました。最初の二日間は、パン、牛乳、果物など、病院に保存されていた食料品が患者さんに配られました。それから十日間は、大阪、京都、滋賀、岡山などその他多くの大学病院から送られてきたお弁当を、入院患者さんや救急外来で治療を受けている患者さんに配りました。しかし、患者さんの中には、お弁当のご飯がかたすぎたり、おかずの形が大きすぎたりして食べられない人がいました。その様な人に、電子レンジを使っておかゆを作ったり、カロリーを計算し、あるいはおかずを細かくきざんだり、患者さんが食べやすいように食事をととのえることを看護婦は行いました。

病室に備えてあるスチーム暖房機は地震で、パイプにきれつができて、約一カ月間使うことが出来ませんでした。その間、入院患者さんや、病棟で働く医師や看護婦などの職員の多くが、暖房のない寒さを我慢しなければなりません。看護婦は、寒さで患者さんの病気が悪くならないように、支援物資として届けられたカイロや毛布を渡したり、電気毛布を貸し出したり、空になった点滴パックにお湯を入れて湯たんぽ代わりに使ったりと工夫しました。

多くの人々に 助けられて

地震がおこったその日のお昼過ぎには、被災しなかった地域の病院から、治療に使う器具や薬、ガーゼなどの材料が支援物資として運ばれるようになりました。翌日からは、文部省の指導によって、隣接した県や遠くの地域にある大学病院から、治療や看護に必要な物、患者さんの生活に使う物や食料品や飲料水が、ヘリコプターやトラックで送られてくるようになりました。そのおかげで、多くの被災者の救急治療とその後入院治療を続けることが出来ました。また、全国各地から、多くの人々が神戸大学病院を訪ね、二日から二週間、ボランティアとして看護活動を支援しました。そ



他の機関から応援に駆けつけた看護婦の皆さん

の主な人々は、学生と看護の先生や他県の病院の看護婦です。その数は、計九十人でした。

地震がおこってから、ガス、水道、電気が回復するまでの間は、患者さんが増えたことや水道が使えなかったことなどによって、看護婦の仕事はふだんの二倍以上にも増えました。それらの仕事をするために、看護婦は寝むる間もなく働きました。その看護婦の中には、家がこわれたり燃えて家をなくした人も含まれていました。ボランティアの人々の助けによって、働き続けて疲れはてた看護婦に、平均二日間のお休みをあげることが出来ました。お休みを取った看護婦は、そのお休みを、壊れた家を片づけたり、体や心を休めたり、家族の世話をすることに使いました。



名古屋大学医学部附属病院の看護婦からの贈り物